

3 - 4 房総半島南部の活断層

Active Faults in the Southern Part of Boso Peninsula

東京大学地震研究所構造地質部門

村 井 勇

Isamu Murai,

Earthquake Research Institute,

University of Tokyo

最近行われた房総半島南部の三角測量の再測から、著しい水平ひずみの蓄積のあることが知られている（国土地理院，第27回地震予知連絡会資料）。ひずみの蓄積の最も著しい地域は、鋸山から天津を結ぶ線上にあり，この地域に発達する活断層の分布と関係をもつように思われる。

房総半島の南部，保田・岩井附近から鴨川にかけての地域は，いわゆる嶺岡隆起帯と呼ばれる地域で，房総半島の中核部をなし，古第三層よりなる基盤岩が露出し，複雑な断層が発達している（第1図参照）。漸新世以降に地向斜が発達し，中新世中期には超塩基性岩類の活動とともに上昇運動が始まり，その後，この地帯を中心にして造構運動が段階的に進行した。隆起帯は複雑な構造をもち，東西方向の大規模な断層が発達しており，地層は褶曲構造が破壊されて，一種のサンドイッチ構造を示す。この嶺岡隆起帯を中心に活断層地形らしい地溝状の地形が発達し，鴨川地溝と呼ばれる。最も著しい断層地形は，岩井の南に見られる急崖で，岩井断層と呼ばれ，100m以上の高度をもつ。大塚（1948）はこれを obsequent fault line scarp と説明した。すなわち，地質構造の上では北側が南側よりも高い位置にあり，現在見られるような北向の急崖は断層にそう撰択的侵食によるとした。鋸山の南側や，鴨川の北側にも顕著な南向きの急崖があり，これらの南北では，地質構造の上では南側が高いから，同じような考え方をすれば，いずれも obsequent fault line scarp ということになる。しかし房総半島全域の地形を概観し，その形成過程を考えた場合，保田－鴨川間の地溝状の地形がすべて撰択的侵食によって生じたものとは解釈しにくい。岩井断層に沿っては，wind gap, off set などの地形が認められ，最近の活動の痕跡を残している。

嶺岡隆起帯は更新世以降も隆起を続けたと考えられ，房総半島の水系はいずれも隆起帯の中心軸部から南北に向って流れている。この隆起帯の頂部に鴨川地溝帯があり，その東方延長の海底に鴨川海底谷と波太海底谷が続いている。房総半島では，鴨川地溝帯を中心とする地域に活断層地形の発達が認められる（村井・金子，1975），（第2図参照）。大部分がリニアメ

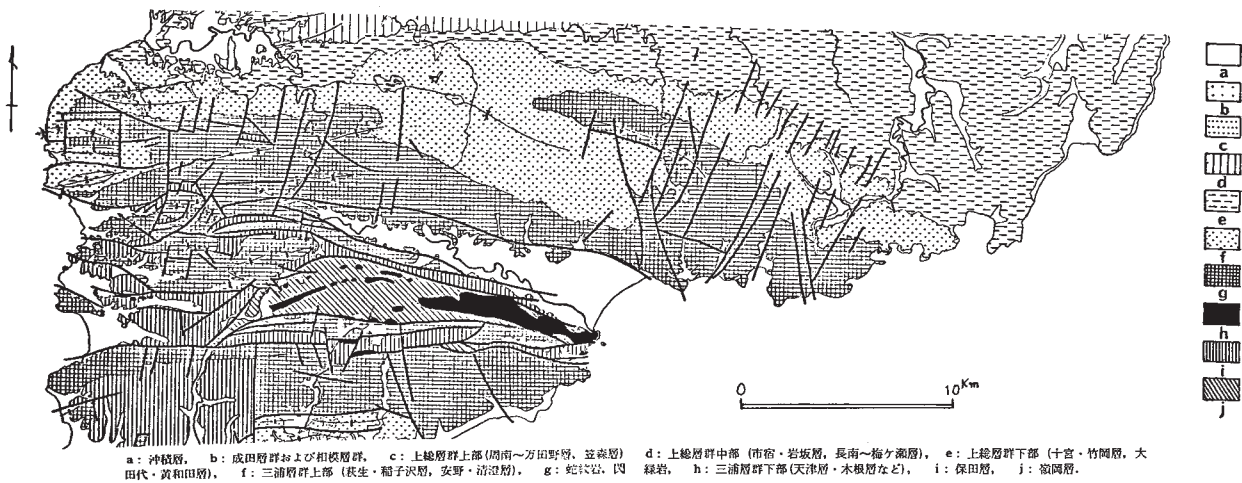
ントで、山地中に生じたせまい凹地帯などの地形を呈し、破碎帯が選択的侵食を受けて生じたと思われる地形が多い。厳密な意味で活断層と呼べるものは、地溝帯の南を限る断層のみで、その他のものについては活動度の検討をしなければならない。全般的に三浦半島のような新鮮な活断層地形はなく、横ずれ変位はほとんど見られない。

地溝帯の北を限る断層は、開析が進んだ北高の高い断層岩のような地形を示す。西半部は2方向のリニアメントの進み合わせよりなり、その部分で岩石が複雑に破碎されている。東半部は断層崖が開析されて後進しており、その南側には沖積面が発達している。最近の活動の痕跡はなく若い堆積地形面を切るような場所は見られない。水平ひずみの著しい蓄積は、この断層に沿う地域で認められる。地溝帯の内部にも複雑なりニアメントが発達する。地溝帯の中央を東西に走る山地の南縁に沿って、ほとんど直線的に走る断層が約16 kmにわたって追跡できる。場所によっては凹地帯が走り、山地の斜面と逆傾斜の急崖が続いている。これに接する中央山地の山稜縁の末端が西方へひきずられたような様相を示し、右横ずれ変位の跡かと考えられる。地溝帯の南縁を限る断層は全長26 km以上に及び、新鮮な活断層地形を示す。多くの分岐断層や副断層を伴ない、主断層はいずれも北向の断層崖をもち、縦ずれ（正断層）の活断層と考えられる。岩井断層の南側では右横ずれ性の offset が認められる。顕著な地質断層にそっており、東部では破碎帯に沿って鉱泉が湧出している。中央山地より南流する水系はいずれも断層によって切られ、上流部が陥没して堆積を生じたり、wind gap ができていたりしている。その上流と下流の間に沖積段丘に不連続が認められる。これらのことから断層運動は長期間にわたってくりかえされ、最近にも活動があったことが知れる。

房総半島では、鴨川地溝を中心とする地域以外には顕著な活断層またはリニアメントは認められない。これより北側では興津附近に、南側では第三芳村一帯にわずかに認められるだけである。房総南端部では、関東地震の際に館山市の北東部で地変が生じ、延命寺・宇土・滝川断層が生じた（山崎，1925）。附付に小規模なりニアメントがあり、小地溝状の地形が残っていることから、既存の構造に沿った運動と考えられる。いずれも南側の沈下が認められたが、横ずれ変位については明らかでない。

参 考 文 献

- 村井 湧・金子史朗（1975）：南関東の活断層分布，自然災害科学資料解析，2
大塚弥之助（1948）：オブセクエント断層崖の一例，大塚地理学会論文集，田中啓爾還暦記念号，79 - 84
山崎直方（1925）：関東地震の地形学的考察，震災予防調査会報告，100乙，11 - 54



第1図 房総半島南部の地質図

Fig. 1 Geological map of the southern part of Boso peninsula.



第2図 活断層分布図, 1: 横ずれ断層,

2: 垂直ずれ断層, 3: リニアメント

Fig. 2 Distribution of active faults 1: strike-type faults, 2: dip-type faults 3: linearment.